

# イタドリの長期安定栽培技術の検討および栽培と活用の普及状況

林業試験場 主査研究員 杉本 小夜

## [はじめに]

イタドリは本県の郷土山菜であるが、シカの食害等により山採りが困難となってきたため、近年栽培に取り組む地域が増加している。また機能性成分分析結果から、これまで利用されていなかった部位に多くのポリフェノールが含まれていることが明らかになり、それらを活用した商品が各地で生まれている。このような中、栽培面では長期安定栽培技術の開発が望まれており、今回、適切な収穫期間についての検討を行った。また今後、栽培や加工を検討されている方々への参考となるよう、県内の栽培状況や活用事例について紹介する。

## [材料と方法]

### 1) 長期安定栽培技術の検討

長期栽培地では収穫量が減少する事例があり、安定した収穫量を維持する適切な収穫期間を検討するため、収穫 3 年目の栽培地において収穫期間(春の若芽の収穫日数)を 1 週間、2 週間、3 週間の 3 区に分け、収穫量とその後の株の生育状況を調査した(図 1)。また、イタドリと同様の多年生作物であるスパラガスでは、前年の根の糖度が高くなると、翌春の収穫量が増加傾向となる研究例がある。イタドリについても同様に、根茎の糖度が収穫量予測の指標となるか検討するため、12 月に各試験区の株から根茎を採取し糖度を測定した。

### 2) 栽培と活用の普及状況

林業試験場では、2016 年に栽培に関する研究成果をまとめた「イタドリ栽培技術マニュアル」を作成し、2020 年には工業技術センターとの共同研究成果をまとめた「イタドリ加工・活用マニュアル」を作成した。これまで、これらのマニュアルを活用した研修会の開催等により普及を図っている。今回、県内の栽培や活用の普及・定着状況について調査を行った。

## [結果と考察]

### 1) 長期安定栽培技術の検討

4 月 2 日～27 日の収穫期間のうち、収穫のピークは 4 月 21 日であり(図 2)、3 週間区に対して、1 週間区は 21%、2 週間区は 55%の収穫量となった(図 3)。その後発生する茎の平均根元直径は 3 週間区が最も小さくなった(図 4)。根茎の糖度は、1 週間区が最も高く、次いで 2 週間区、3 週間区となり、収穫期間が短いほど根茎の糖度が高くなり、アスパラガスと同様の傾向がみられた(図 5)。今後、根茎の糖度と翌年の収穫量の関係を継続調査する。

### 2) 栽培と活用の普及状況

現在、地域の団体等が紀中・紀南を中心に 13 市町 20 ヶ所でイタドリ栽培を行っている。また、今年度から試験場で選抜を行った優良系統苗「東牟婁 3」の販売が(一財)バイオセンター中津で始まり、個人の栽培者も増加している(図 6)。活用については、ポリフェノールが多い部位である皮や花、葉、若芽の先などを活用したドレッシングやお茶、焼き菓子など新たな商品が日高川町や白浜町などで近年販売されており、普及・定着が図られていることがわかった(図 7)。



図1 イタドリ収穫調査試験地

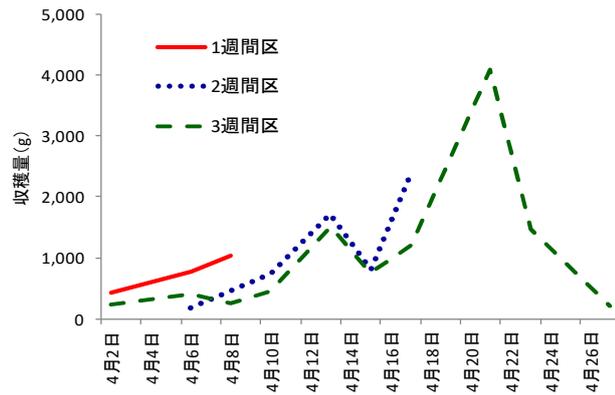


図2 収穫期間別の収穫量の推移

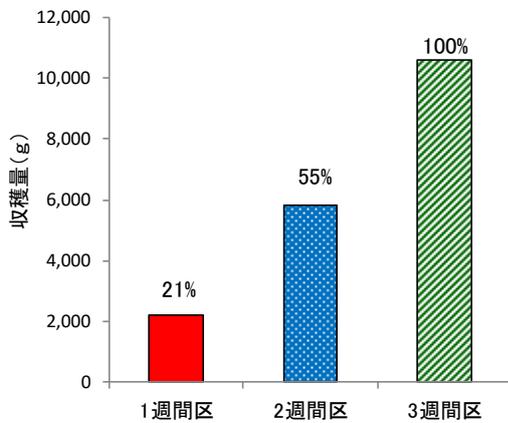


図3 収穫期間別の若芽収穫量  
※各試験区の株数：29～31株

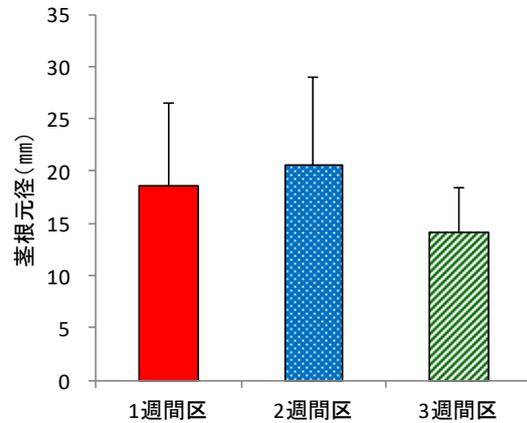


図4 収穫期間別の茎平均根元径 (6月)  
※エラーバーは標準偏差を示す

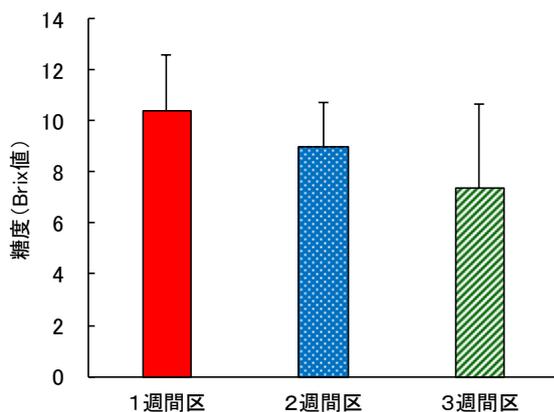


図5 収穫期間別の根茎の糖度 (12月)  
※エラーバーは標準偏差を表す



図6 販売された優良系統苗「東牟婁3」  
((一財)バイオセンター中津)



図7 イタドリ新商品の販売状況  
(San Pin 中津)